

二人連

泉鏡花作

上

「彼處に　　あゝ、彼處に

と　　右側の辻を、葉茶屋の軒に片寄つて

佇んだ、銀杏返の色白な、姿の優しい女を視ながら、
男はふと立停つた。

芝の金杉橋を渡つた處で、車掌臺から降りるとや
がて、電車の隔てが、軋んで除かれた時である。

「側は違ふ

彼の女は、何時も此方側に

立つて居た。」

其の左側で、然うして男の足のふと淀んだのを、
向側で女が見て、こゝに待つ身を氣着かずとか、前
髪はづれに、白い手で密と招いた。

彼の女は然うでなかつた。斯うした時は、淑やか

に肩を落して、片袖から手を入れて、袂を引いて見せるのが合圖であつた。較べて是非を云

ふのではない、それは世を忍んだあひゞきで、此は人目を憚らず墓参りに行くのである。今詣でらるゝ墓のぬしは、其の果敢ない女で、月夜の辻でも袖で教へて、手を舉げては招かなかつた。世に亡き草葉の蔭からも、想ふに手を舉げては招かぬであらう。其の為でもあるまいけれども、亡くなつて半年足らず、まだ墓参をしないで居た。

と思ふにつけ、今日は彼岸の曇りながら、あの招く手に、ちら／＼友染の絲遊する、其を陽に向つて眩しさうに、「分つた。」

と帽子の廂に、一寸手を掛け、頷いて見せると、婀娜なお彼岸の同行は、葉茶屋の軒を翻然と出て、白足袋清き褌捌き、線路を斜に、すら／＼と此方へ寄つて、見ないやうに、唯横顔で、男に美しい瞳を注いだ。何と云ふ中ではないが、町中の人通り、女は斯うしたもののさうな。

「早かつたね、餘程待たせましたか。」

「いゝえ、でもね、兄さん。」

と濃い睫毛、きれの長いのを、ぱつちりさして、

「電車を四五臺。」

「丁度、其の數ぐらゐ、彼岸の所以か太い混雑方でね、銀座の乗り換で待たされましたよ。」

濟まなかつた。遅く成つて。」

「まあ、私は構ひませんわ。お墓へ行つたら、お妻さんに然う言つてお上げなさいよ。」

「何とさ。」

「濟まなかつた、遅く成つてとさ、兄さん。」

「はい、畏りました。」

商賣屋の店續きを、立竝んで歩行す。行交ふ道の、人も人目も繁けれど、柳の袖に寄せた身に、町の埃も霞である。

「お道さん、よく出られたね。いつか一所に御飯

を食^たべた時^{とき}約^{やく}束^{そく}はしたんだが、一寸^{ちよいと}ぢや出^でられなからうと思^{おも}つたよ。」

「何^{なん}ですか、詰^{つま}まらずに忙^{いそが}しくつて。あの、何^どの^みち、彼^{ひが}岸^{んぢゆう}中^{ちゆう}には思^{おも}ひましたけれども、今^け日^ふはね、まだ、些^{ちつ}と無^む理^りだつたんです。ですがね、今^け朝^さ、明^{あけ}方^{がた}に妻^{ねえ}さんの夢^{ゆめ}を見^みましてね。」

「夢^{ゆめ}を、」

男^{をとこ}は洋^{すて}杖^{つき}の柄^ひを肱^{ひぢ}に掛^かけ、

「どんな夢^{ゆめ}。」

「來^きたのよ、私^{わたし}ん許^{とこ}へ——まあ、後^{あと}でゆつくり話^{はな}しますわ。でね、すぐにお墓^{はか}でゞも逢^あはなければ、氣^きが濟^すまなく成^なつたものですから、先^{さき}へお手^て紙^{がみ}でもあげとかないで、何^{なに}うか知^しら御^ご都^つ合^{がふ}は、と然^さう思^{おも}ひましたけれど、電^{でん}話^わをお掛^{かけ}して見^みましたので、も可^ようござんしたわね、貴^{あなた}方^{はう}の方も。」

「私^{わたし}は心^{こゝろ}待^{まち}に待^まつて居^あいたから、お呼^よび出^だし次^し第^{だい}仔^{さい}細^{さい}なしさ。處^{ところ}で、お寺^{てら}は、あゝ、彼^{あそこ}處^こに活^{くわつ}動^{どう}寫^{しや}眞^{しん}館^{くわん}が

ある。」

旗はたが萌黄もえぎに、藍あゐに、白しろに、鳩はとの如ごとく翻ひるがへる。

「鄰角となりかどが大きな炭屋すみやと

あの、露地ろぢだね、

此間このあひだお話しはなしたつた。」

「はあ、彼處あそこですわ。」

「ぢやあ此方側こつちかたへ御足勞ごそくらうを掛かけるがものはなかつた。お道さんみちが待つてた方へはう、手前てまへどもから出向でむくんだつけ。」

「でも、兄さんにいは、此方側こつちかたが可懐なつかしいでせうと思おもつ

て、

「何故なぜだい。」

「一寸ちよいと、」

と目許めもとに莞爾にっこりして、

「此の邊へんの裏うらぢやないの、時々じ、一所いっしょに、お二人ふたりで。」

男をとこは袖そでを引合ひきあはせた。

「不可いけない

佛ほとけが風邪かぜをひくよ。」

お道は軽く胸を敲いて、

「悪かつた、御免なさいよ。」

あの、身

體の弱い人が、その上かぜをひいては、お骨も冷えてなく成るでせう。」

「それ、電車だよ、氣をおつけ。」

「大丈夫。」

ぬかるみを拾ふやうに、も一度線路を向うへ切つた。

活動寫眞の旗の影。

「お道さん、花を買つて來れば可つたね。氣の着かない事をした。此邊に花屋はなさうだね。」

「お寺には密ばかりだし。然うね。」

と立停まつて、伸上つたり、透したり、氣を揉む心の映る顔は、木蓮の眞白き花に、風打戦ぐ風情あり。

「私も先刻來る道で、氣の着かない事はなかつたんですけれど、もしかして、貴方がお待ちなさるや

うぢや悪いと思つて、氣が忙いたもんですから。

「一寸兄さん、私駈け出して行つて其處等を探して來ますわ。」

早や駒下駄に褌が浮く。空は五色の旗の風。

「結構々々、私から御辭退する。何ね、先方ぢや不斷、蓮の花が盛りだとさ。」

「然うね。」

お道は本意なさうに裳を捌いて、

「お妻さんはね、兄さん。」

「何さ。」

「極樂へ行つてるでせうか。」

「馬鹿な事を。」

と言消したが、ふと炭團に目が暗かつた。炭屋の軒の山なす薪に、活動寫眞の看板の眞赤な繪具が、颯と搦んで火が燃える。曲つた露地も暗かつた。

「あの、寺ですよ。」

男は誘はれて目を上げて、

「突當りの、成程、大屋根に擬寶珠がある。彼れ

だね、向裏の芝園橋から見ると言ふのは。」

「えゝ、ですが、あの寺内の下寺なの、右側よ。」

「あゝ、あの門。」

とステッキの柄を向けたが、其のまゝぐいと脇に挟んだ。

「や、お道さん、花屋が居るぜ。」

「眞個にね。」

たゞ四五間の間ながら、二人が揃つて小走りに駆出したのは、――餘り詭へたやうだつたので、立つ陽炎に花車の消えはせずや、と危んだからであつた。

「鉢ばかり、きり花はないのかい。」

「へい。」

と横ちよに下した荷車の花の中へ、若い花屋がのんきな頼杖。廣い露地の晝靜に、荷は小店の駄菓子屋の前にあり。子供が四五人、其の縁臺に、ぼつたら焼をして居たが、金魚屋でないから見返りもせず、長屋々々の格子から、誰差覗く影もなし。

お道は男の後から、肩越に、露の瞳を――花に、葉に。

「成りたけ綺麗な。」
と差覗く。

「さあ、言ふまでもないがね、
に、坊主菊、三色菫
を掛け兼ねるな。」
と、些と此は水引
松葉菊

「御進物になさいますんで？」

「まづね、」

「ぢやあ、此の西洋花、チウリップ、こりやお職
だよ。」

と立直つた氣競聲。

「紫の百合のやうな。」

「それになさいましな、他にはありませんもの。」

「ハイカラだね。」

「匂ふでせう、屹とお喜びだわ。」

「香水以上でね。」

と、花屋は横状に鼻を撫でる。

「二鉢。」

「苔の多い方、」

「で、幾干だい。」

「へい、一鉢が三貫宛だよ。」

「高いぜ、植木屋。」

「花屋で御覧じろ、きり花にして一輪、易くつて

二貫だ旦那。何しろ香水以上だからね。」

「以上にしる、以下にしる、些と方外な値ぢやな

いか。」

「兄さん、お値切なさらない方が可いわ。佛様に

手向けるんですから。」

ハツと思つた、我知らず見たお道の顔は、花も香も、近まさりがしたのである。

「あやまつた。

ちや六十錢——は

てな、十錢と云ふのが一つ

「私持つて居ます。」

と、いそ／＼帯を抜いた懐紙、開くと白銀五つ六つ、紫の鹽瀬を、迂る。

「や、御佛參のお手向けですかい。」

花屋は横顔を平手で敲いて、ニヤリとして、

「串戯ぢやない、二鉢三貫で澤山なんです。」

「然うかい。ぢや、まあ、五十錢銀貨を一個。」

お道さん、最う可いんだよ。」

「口あけでまだお剩錢が——旦那、これぢや

多過ぎる。」

「まあ、可いから。」

「可いつて、お前さん。」

「植木やさん。」

お道が優しく微笑んで、

「あとは花の香の御祝儀よ。」

「泥鉢だー 姉さん済みませんね」

御近所なら私が持つてお供をしゃせう。」

「何、それに及ぶものか、私が持つよ。」

と男も言つた。二十四五なが仇氣なく、

「否、私が持ちたいの。」

「植木屋さん、お世話だつた。」

「御機嫌よう、おまゐりをなさいます。」

で、すんなりした胸の處へ二鉢据ゑて行くお道の後から、男は腕組してうつむいて續いた。

濃い紫の其の花を。ー

「植ゑたいわね。」

臺石が草に缺けた、小やかな墓の前の黒土に、お道は袖を敷くばかりにして、

「ステツキを持つて來ると宜うござんした。」

それは閼伽桶に水を汲む時、厨の柱に預けて來た。

「お待ちなさいよ。」

と獨言も、うつかりして、すつと簪を抜いて取る

と、晃乎々々と銀のつくしが生えたやうに、土を掘らうとしたのである。

片手に線香、片手に閻伽桶を提げたなりで、暫く茫乎して立つた男が、慌しく聲を掛けた。

「あゝ、お待ちお道さん、それぢや佛の目が痛

む。

「あら 簪で突刺して。」

カチリと投げるやうに手を離れた。

「私、何うしませう。」

見上げる睨に、淡く心轟きの血を染めた。

「否、涙でさ、お前さんが優しいので。何の、私
何うだつて、お道さんに逢ひたさに、もう一度娑婆
へ来たからう。仲よしは嬉しいね。―― さあ、
お参りをしよう、水を手向けて。―― 少し離れ
ないと、お召ものが臺なしです。何だか、亂暴なや
うだけれど、此が功德に成るんだつてね。」

「えゝ然うなのよ、澤山かけてあげて下さいな。」
「冷くはないか知ら。髪を洗つてるやうに見える。」

さら／＼と注ぐ水は、石の蒼さに浸透つて、颯と落ちて、柳が亂るゝやうであつた。空が暗くなつた。柄杓を片手に、一足退くと、控べたお道が身を寄せ、

「手向の水の石の窪みに、密の葉が枯れたのがあゝ、まだ今時分、眞黒な實が残つて、此處を洗ひませう。手桶を貸して、」

「お道さん。」
男は迫つた聾なりし。

「手で洗ふのを無精して、其處を打棄つて置くのぢやない？ 密の實の雨水に朽ちたのは、人を殺す毒と聞きつゝ、此の手を其處へ觸つちや、一思ひに、掬つて、私は自分ながら、うっかり飲みさうで成らないから。」

紫紺しこんの袂たもとを口くちにして、雪ゆきの腕かひなをさしのべて、石いしを洗あらつて居ゐたお道みちが、打仰うちあふぐやうに頷うなづくと、おくれ毛げをはらりと拂はらつて、

「あゝ、水みづが匆はねて。」

と目めを拭ぬぐつた。

垣根かきねの外そで、鶯うぐひすが鳴ないた。

「さあ、綺麗きれいになりました。」

と、その手てを鉢植はちうゑの花はなに分わけつゝ、

「枯かれないで下くださいよ。」

さあ、おまゐ

りなさいまし。手てをお洗あらひなさいますか。かけて上げませう、はい、ハンカチがありますわ。」

やがてお道みちが、墓はかの前まへに居ゐ代あつた時とき、そのコオトを脱ぬいで、卜置場おきばしよ所みまはを見廻みまはすと、右みぎも左ひだりも卵塔らんたふばかりで、たしなみの紋着もんつきの黒縮緬くろちりめんの羽織はおりの袖そでに、抱かへてをがまうとするのを見みて、それは男おとこが預あづかつた。

「叱しかられてよ、姉ねえさんに。」

「何、ほめられる、」

と肱に掛けて、衝とその傍を離れつゝ、あらぬ方をば見て立つた。塔婆まばらな墓地荒れて、瀬戸物の毀れたやうに乾いた土に、ペンノ草、じくノ水に、柘の枯葉、敷散らかつた炭俵のほぐれの中から、一本こぼれ咲の菜の花の、褪せて白いのが果敢なかつた。

三方を長屋の裏に、枕もあらはに取圍まれて、土の下にも寝起のたびに、嘸氣兼をするであらう。

と涙ぐんだ目の行く處に、眉に兩袖を合せ、袖口が揃つて美しい姿を見た。伏をがんで、その清しい目を閉づる時、男も瞳を伏せて、ほろりとした。

「お待遠様でした。」

「オト越に手を掛けて、」

「先生。」

「え。」

「一句、姉さんにお手向けなさいな。」

差さ覗しのくやうに言いふ、其その手ての腕かひなに掛かつたのが、コオ
ト越こしながら、然さりながら、衰みのの雪ゆきほど身みにこたへ
て、優やさしさにゾツとする
柳やなぎの絡まとふ重おもたさ

は、お妻つまの影かげも添そつたであらう。

「それ處ところなもんですか。」

【完】